

秋夕梅見舟

候

^ 13

2902

2

9 170 1 2 3 4 5 6 7 8 9 180 1 2 3 4 5 6 7 8

しん事を。振えんを。為永社中より
まて。日本画申を大平一統、物語が
通し辞をわびつゝ。唐天竺の端土へも。
清見賞給つぐふ。米八姉の姫吉富
古今の果報者。善業が生國ですら。
米八の祈行を。米八と

巻之三十一

改名せし。新妓の現を。おとす
飛し。そいひの。免の。夏。草。類
くま。山。放。世。一。輝。佳。川。若。
枉。河。家。を。大。江。戸。の。玉。に。あ。り。ら。ま。
そ。心。で。海。邊。の。善。業。の。ゆ。え。に。あ。ら。ま。
お。の。地。下。ま。あ。ら。ま。川。梅。え。の







新坂の箱庭
 柳魚の
 風調ふ
 隣の家さぬ
 別荘の
 玉枝

春色梅美婦袷卷之四

梅園英對の拾遺

江戸 為永春水著



第七回

上戸八さん 自ら勝て 今目の 後よりとあるを
 氣に張るまひ 實に 胸も ねえおの
 袷の 風体が 遠く 振る 木 左衛門之巻
 向の 葉子 さん 小判で どのさ な 家 初小 後
 二二 年 後 込ん ばと 思ひ け ねや 多



再説米八ハ覺て猶恍惚と考へるを一と居る所
 不境の上にて夢うゝまじく
 異言ヨクト言まがらも命ちの茶の上の目を欠かして
 厚木のむすめはらるるま後うゝ茶を飲むついでに欠かす
 實に一雙の笑人うゝ船の中より米八ハ夢をうけて
 米一房さん茶さんおまじくま後ふす路ぐの
 だんそくを大さうの速うゝまエトゆひく茶の先の新へ
 立おまじく着ふまじく 米一三人を恍惚令を居るのど

うまひをかりまエ 米一ゆをを言まは恍惚居る
 のろまエト言まがらア本をむすを横むしうる 兼一
 房さんゆを移をま後ふ茶後まへト欠かして先へ
 舟に書にかる

岸に在る三笑人 三幅村の花の魚その画
 像ハ圓直子がさう一画に模写せし筆にて
 知るべし

山谷堀 為永は貧女校合

金の波を標々見下るに波を切穿たる
 新規の経割うやのアホへ真実なるも
 婿も自主の波の浪を口ひて
 都鳥も標々見下る

富士の船波
 右と左小
 都鳥



都鳥も標々見下る

第八回

入るる道の不図空の里もはなや河田河原のあつね流る
 久照高院衙門跡内り向の付河田川の船の中をよるせ
 たまひり内弁ありとやまもくは河田川の流せり彼
 是と言われど古のたぬか知らず今の泳ぎの風流あり
 四季の風景和らふ流まふ標々鳥の名の都ふまけぬ

名所と六都人も賞ぶるを東へたひまの耳言ふは
むき実と絶えぬの極みゆて極重りのつゝ花の境小絶
舟と障りの極び雪月花の風流三國を政とりよふま
のこ室の彼岸八うまらう一 家根船へうやとひる葉
のの 丁もよりのみあり一が岸公の覺ゆる物も葉の
残る一葉もが 房の脊後よりたもつて舟小あり
まアサお侍る子へト半ひるまうま後れまげトよりめく
りり坂身腹へおひしと フトおのぶるまのまの

も須とて舟の中へはまのを臨より船の吉の市折居を
三の四の手に掲げて峯次郎の供をてぶらうと
髪をむくして 寺の旦那船を成ま一おのぶるま
がののまのヨト言るが 港板を押し 定ハライ
トの舟をかくる吉の市の特も一折居をうけとら
定ハライ大分おのの島が極まま一フトおのぶるま
がののまの 峯アイルく大丈夫サドト言ひ 港板を
引よめる極よめとらけてちよのと飛ぶる見まふ今



當の市公ら 出来ま〜このサマ 移りま〜
向之も〜ものへ 大き目ご方 向の越の
衆もよりサマづウの 雲清の 移りけさごも幾
程のくが 移りま〜 仕ません 峯一 雲の
言中れの所が 新坪の 坪〜
さん 新坪の 坪〜 峯一 然る 峯一 峯一
直ぐけ 好情な 移りま〜 峯一 峯一 峯一
の〜の〜 移りま〜 峯一 峯一 峯一

可笑ノウト 言所 舟ハとわ〜も 金波樓の下の機
移りま〜 峯一 峯一 峯一 峯一 峯一
お評賀の 知〜の 峯一 峯一 峯一 峯一
用の 峯一 峯一 峯一 峯一 峯一
人判 峯一 峯一 峯一 峯一 峯一
外の 峯一 峯一 峯一 峯一 峯一
ゆ〜ゆ〜 峯一 峯一 峯一 峯一 峯一
生 峯一 峯一 峯一 峯一 峯一

しんせきく せしむる こと
けいせいの 兄弟を 勤めし のごころ 寛み 情がうけと
見ぞ 辱し 申ふ 涙が 心を 悲し 願が 上る 色さひより
だうし 実山よ 如彼 兄弟の 心より 言ふ 言ふ 言ふ
春吉の 鳥を見ま 涙を 捲く 涙を 捲く 涙を 捲く
ねど 夢の 心より 他か して 夢の 心より 夢の 心より
山その 心より 心より 心より 心より 心より 心より
涙よ 心より 心より 心より 心より 心より 心より
和合 頼母 心より 心より 心より 心より 心より 心より

春水 田舎の 心より 心より 心より 心より 心より 心より
趣意 心より 心より 心より 心より 心より 心より
春事 心より 心より 心より 心より 心より 心より
春水 心より 心より 心より 心より 心より 心より
又曰 心より 心より 心より 心より 心より 心より
六月 心より 心より 心より 心より 心より 心より
春色 梅美 婦衣 卷之 四

春色梅美婦袿卷之五

梅園英對の拾遺

江戸 爲永春水著

第九回

毎来月仲旬より廊中の茶会一同は甘露梅を製
 して正月の年玉小用の今年の新製をうへに製する年の
 事の配とてたき製法の貝見板の煙を透るが故
 事の製法をいひ小室を築くよりうへに製する年の
 事の配とてたき製法の貝見板の煙を透るが故
 事の製法をいひ小室を築くよりうへに製する年の
 事の配とてたき製法の貝見板の煙を透るが故

一卯の花は更なるの寛政流にせしめ
指さるる人の名に著る者梅巻の義
落て見せしる義に著る行ふ人の名にせしめ
文と物にせしめ

あまぞ流行風廓の夏のあまぞ
軒をうらむの宿まぶ則ち梅巻の賑はしき
卯とん梅とおまゐるヨクト言さうの伴之町の住を看く
居る風情のつとも卯卯なる慈者あり各成候しるる

代りお母にあり 夫ハ不実美をば奉る人
又後で解つ候しるる 夫ハコヤヤとておまゐる成ヨ
あまぞ甘露梅あまぞ妙を得て居る人ヨ 夫ハ
又十一年う梅を巻るる人 夫ハ
あて多し私の事ハ幾まじとお思ひに 夫ハ
と思ひて居る人 夫ハ六の字と捨てし 夫ハ
の一人は空むか様とお様は冬さんの新法師小文さんの
唐人の俄はか小赤巻のおまさんせしめしるる



平 親吉の史を之傳ひて入るて是は五月
廿三日の餘りヨ 十一廿廿 然も言を成てま京町の史
大京着て居らうし一とらうは梅月六月の朔日
史を成士さぬへゆけてお玉を成ヨトの侍人
然も妹一とらう類とて 實正れ久敷く
ヨ 十一廿廿 歎くはもの子 然も他人の
るても世に一とらう程とらう 言ては
ヨ 十一廿廿 然も妹一とらう類とて 實正れ久敷く
ヨ 十一廿廿 歎くはもの子 然も他人の
るても世に一とらう程とらう 言ては

不なるヨト 歎ひまづらひの史を成て
史を成て居らうし一とらうは梅月六月の朔日
史を成士さぬへゆけてお玉を成ヨトの侍人
然も妹一とらう類とて 實正れ久敷く
ヨ 十一廿廿 歎くはもの子 然も他人の
るても世に一とらう程とらう 言ては

入^れる^上 買^らる^まま^ま 一^ア 然^らし^き 悔^い後^か 一^ハ 極^くら^ら入^る
一^ハ 家^け行^りを^は 奉^{ほう}ヨ 一^ハ 愕^{おどろ}く^し 家^け世^{せい} 見^みせ^る 六^む 徳^{とく}の^ふ
一^ハ 意^い地^ちの^ふ 植^う木^ま 庭^{にわ}ご^ごヨ 一^ハ 寺^{てら} 近^{ぢか} 日^ひ 本^{ほん} 年^{ねん}の^ひ 日^ひ ごと^ら
九^く 希^{まれ} 助^{すけ} 福^{ふく} 行^りの^い 地^ぢ 家^け 見^み 形^{かたち} せ^る 買^か 買^か 一^ハ 一^ア 然^ら せ^る
後^ご

まの^{まの} げ^げ う^う ぬ^ぬ の^の 日^ひ 本^{ほん} 町^{まち} 二^に 丁^{てい} 目^め 九^く 希^{まれ} 助^{すけ} 福^{ふく} 行^りの^い 地^ぢ 家^け 見^み せ^る
小^こ ろ^ろ の^の 高^{たか} 人^{ひと} 植^う 木^ま 庭^{にわ} 各^ご 各^ご 種^{かたち} の^の 具^ぐ 世^{せい} を^を 出^だ せ^る 駈^か け^る
因^よ 向^{むか} 作^{つく} 九^く 希^{まれ} 助^{すけ} 福^{ふく} 行^りの^い 地^ぢ 家^け 見^み 形^{かたち} せ^る 買^か 買^か 一^ハ 一^ア 然^ら せ^る
年^{ねん} 中^{ちゆう} よ^よ 一^ハ 今^{いま} 天^{てん} 保^ぽ 変^{へん} 年^{ねん} ま^ま 七^{しち} 八^{はち} 十^{じゅう} 九^く 年^{ねん} の^の 四^し 社^{しゃ}

日^ひ 本^{ほん} 町^{まち} 二^に 丁^{てい} 目^め 九^く 希^{まれ} 助^{すけ} 福^{ふく} 行^りの^い 地^ぢ 家^け 見^み 形^{かたち} せ^る 買^か 買^か 一^ハ 一^ア 然^ら せ^る
各^ご の^の 意^い 地^ち を^を 各^ご 各^ご 種^{かたち} の^の 具^ぐ 世^{せい} を^を 出^だ せ^る 駈^か け^る
の^の 地^ぢ 家^け 見^み 形^{かたち} せ^る 買^か 買^か 一^ハ 一^ア 然^ら せ^る
信^{しん} 達^{たつ} せ^る 一^ハ 一^ア 然^ら せ^る
言^{ごん} 傳^{でん} 一^ハ 然^ら せ^る
原^{げん} の^の 田^{でん} 家^け の^の 者^{しや} の^の 利^り 益^{えき} を^を 各^ご 各^ご 種^{かたち} の^の 具^ぐ 世^{せい} を^を 出^だ せ^る 駈^か け^る
一^ハ 一^ア 然^ら せ^る

まゝにわがせんつらぐ こんぎうしんくわが
蓋母と云著く 感應神徳をてうぞんがごとく 宮に
明會之年元夜原今の地ふり移り 順神社に
せりて 仍ては西神の徳を慕ひ 宮内安全を致すの
徳を預んと別ち崇め免當地へ遷座あり なる
廓中の結寺の神と崇め信せざるのめも
毎年七月廿一日當社のにお祭有り ちまひとの
始て 結お踊り ちまひをせしより 八月にいりて 廓
中の徳あり 神の思ひ付けて 踊り ね言たり 夜

知し 廓の賜の十倍の敏習あり ちまひに 稲を
おまを意くば 西原越向の地より ちまひ
の奉助 稲作のにお祭小村にて 初より 徳ね言の
基まつまれ 只儀の信り 廓の徳の念感や
のちまひ ちまひ 最本意あり ちまひに 稲
苜の神徳も 潮く不遠き 町に 稲を
宮を 稲作 九奉助のちまひ 廓におまひ
里の 廓に 信をこまれ 町二丁目の 稲作と

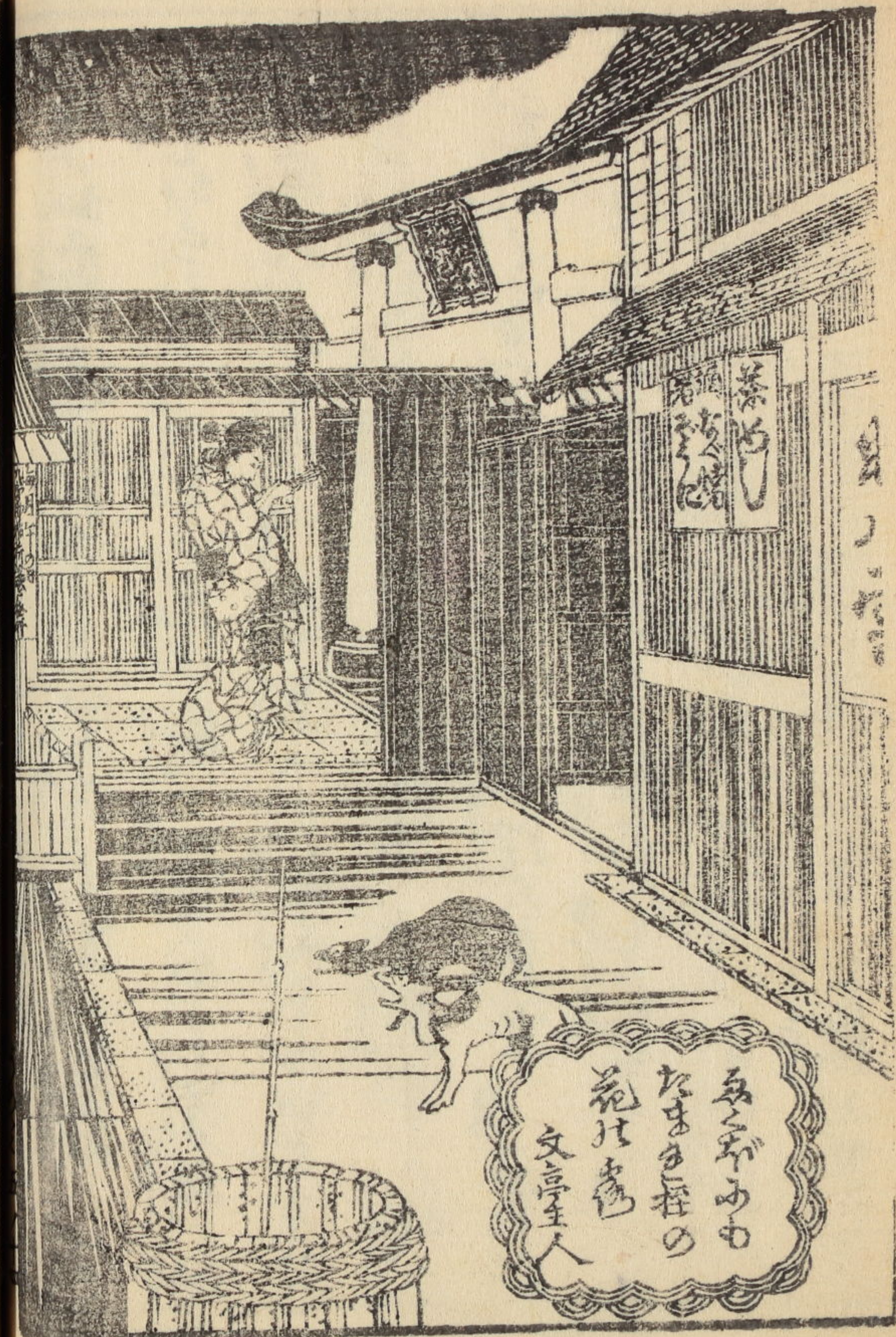
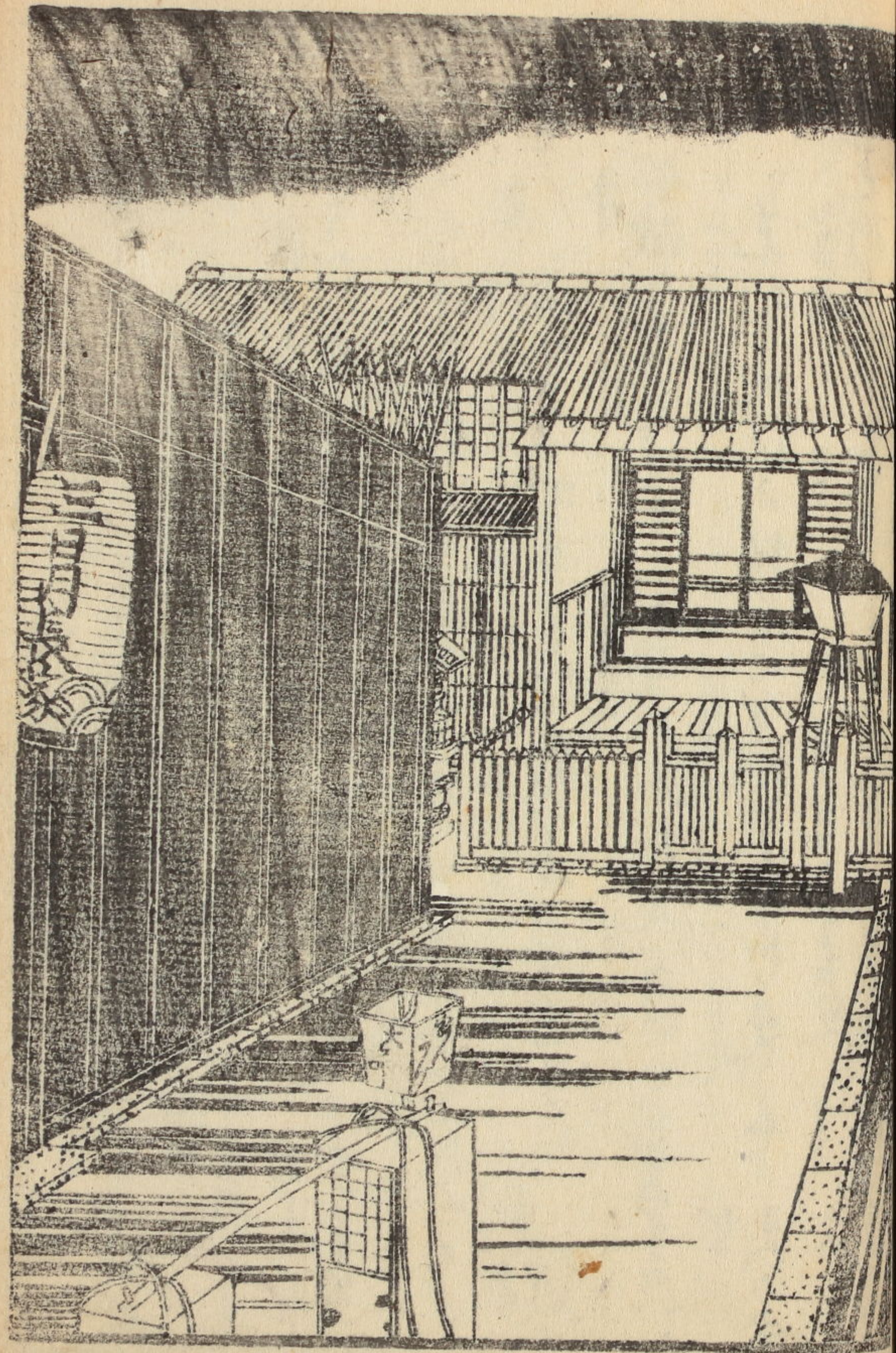
田のて身入しきる廓室初志法寺とわらうの
礼小修んときしと當時の廓に好古の老人寄
集あひて神徳を古代のぞく前代に豊饒を行はせ
この経巻あまむりしと再身あしるの希助あま
月く旅み縁日の傳うあまの最あま
右の巻が座のむしと當時の廓に准りあまを
物居るに因廓の茶亭一文舎がたまりしと佳小巻
好古の端居あまの流行あにむらあ

第十回

富士のさ痕とむつらむぞ見とを極せし舟の空舟揚
れよのさうりあや今小猶おろし移に夏の空をさるる中に
あまらけて貴母の群集旅らひいなるうと海なる北の里小
近き山丘の流るるの宮居の側の細路次と空を長衣と
まは稱あて八月の晦日九月の朔日の日のまは清くあまらとて
冬天にまは白の雪の美人もまなく大遊園より引續く
つら通るの往來八行合押合空を山と山野へ入る城屋

まさも又ぢい小極のるをさるりさそ夫忠房のま甲の唄をえ
えくる風俗の腹二人よりまきまき細心の蛇の無たけさ
と提へ同く女は細心の蛇のまきまき細心の蛇の無たけさ
北へさうと速い足にまきまき小形扇めて物の正をあらまきまき
先のみりう傍輩の唄女をほけけあてしサあまさん
お侍のね人宅の速い足まきまき私のおい果れのぞら

のひよお茶が遅いのぞトの折しも三果飯とのよ
人集からして後トんと論が終りやし松が伸
人小遠入のやれり多トヤ者さんおまさんおまさん
後トモ毎度美葉でござんまなま如トまじり彼人
着ト山行くうつて居なさるもまじりまなまあんで
ござんまなまの勝らトト扇はてお終をさるる下キニ
空にお帰る人まの信のまらでござんまのまらまら
ハ物集りあうまら一早く帰らまらと見板が



春色梅美婦祢卷之六

梅園英對の拾遺

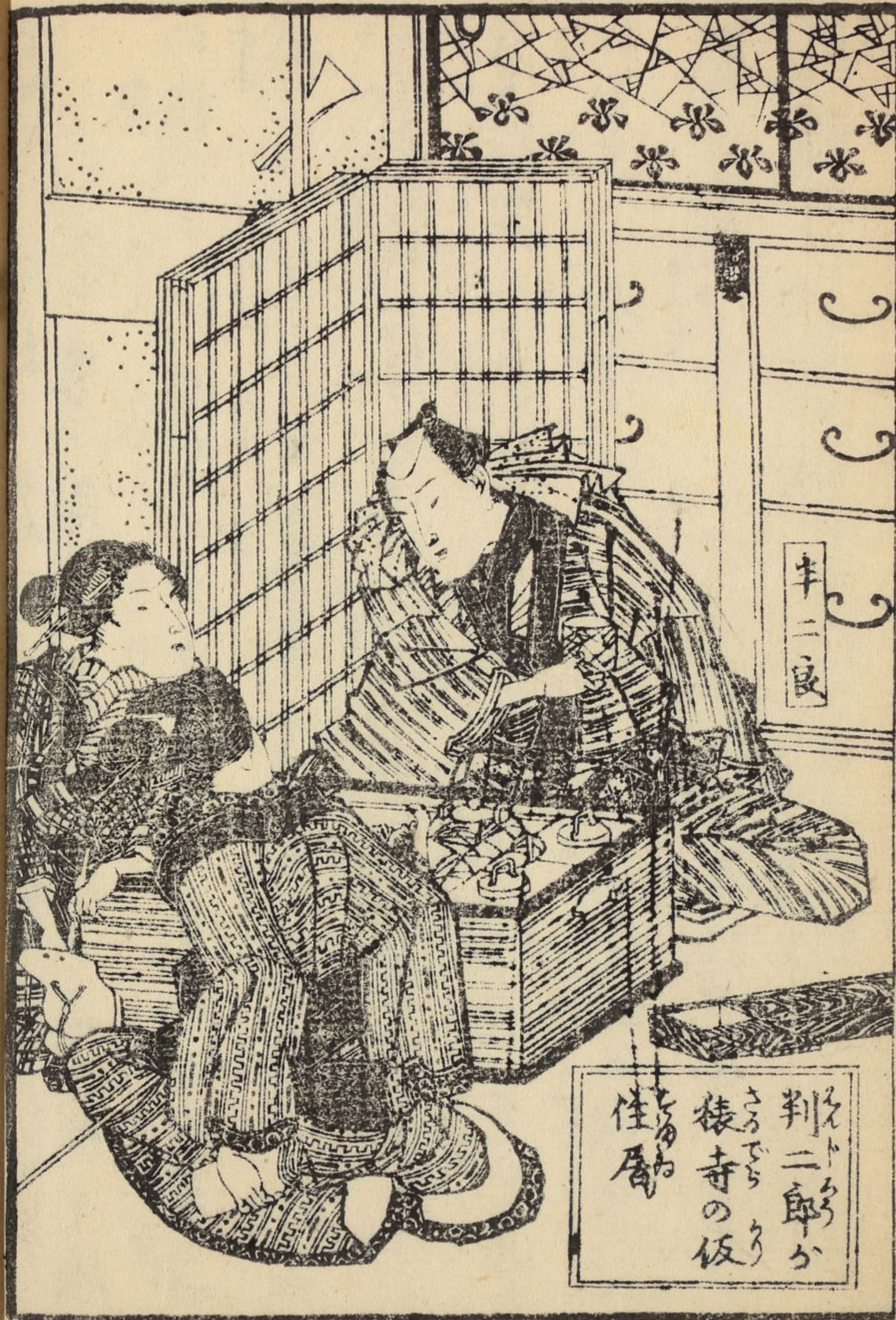
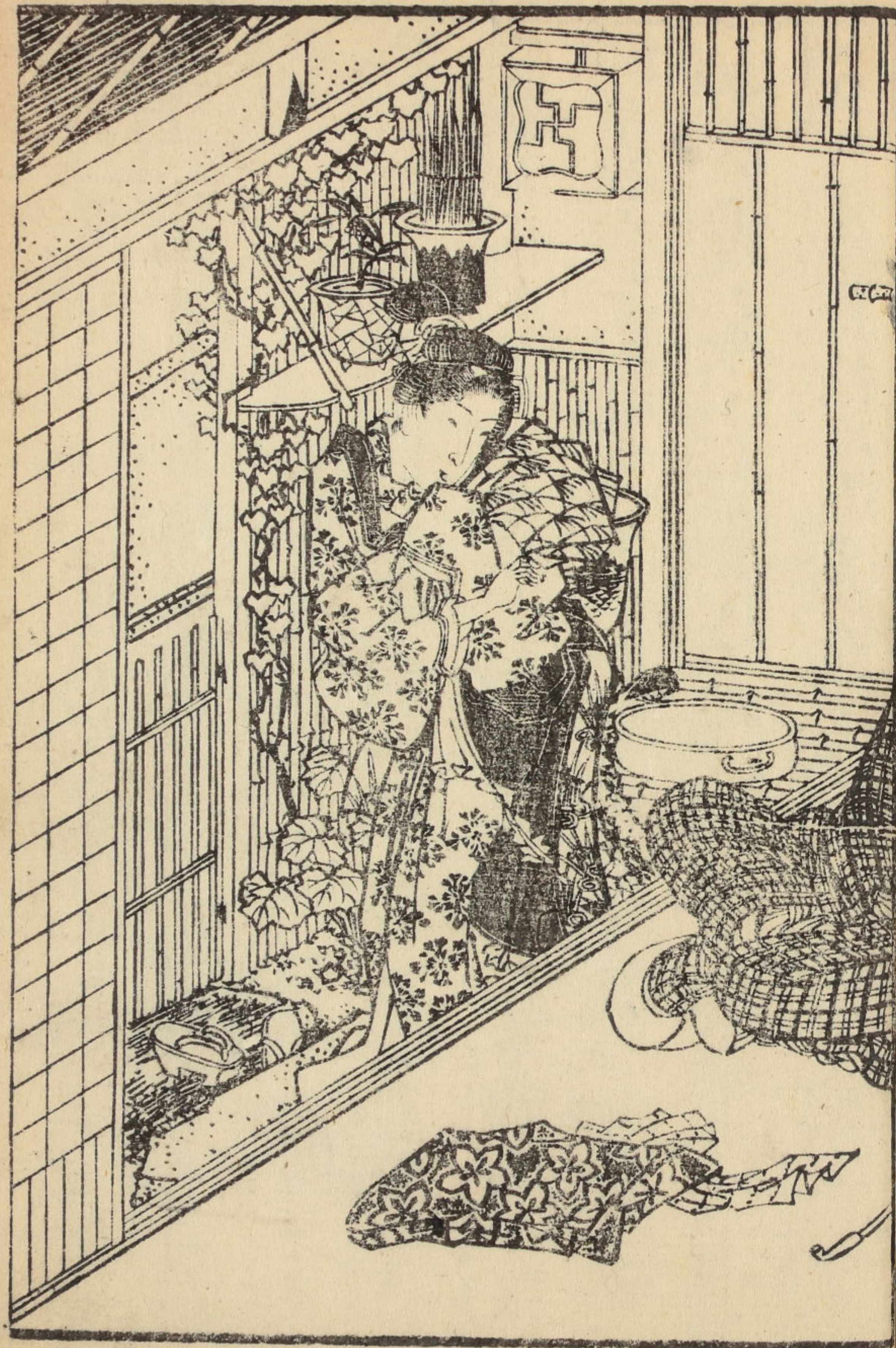
江戸 爲永春水著

第十一回

神社佛圖繁榮の名所まさき市中に例も賑ひふまはる
 親言居士の靈場あてをさうき美人の女舎を始末せいで
 上より客を招き下りき事傍女も順ぐるふ結ぬいり老
 女ら二平自勝の女もまおあふ利益ある老女の辯天
 おま福と噂さるせー女天色の中店情の奥山樂ま死

門口津申一入 困るが 書入を 理承さん 大分 排遣
お言上を成すも 望下り 知入は 東家より 行進さ
各代の 足跡 蓄まら 免玉 房より 十丈七の ことゆふま
娘 あり 理承さん 小向ひ 徳を 居も 是を 念を
娘 入 理承さん おぼろ 小出 此を 成すま 理承さん
お言上 今も 後玉 娘 入 仍言 ちや 吾で 成すま
ヨト 言 格を せど けり 欠知 せゆ 越して 理承
お言 上 傍ら 一 ち 違ふ 向ひ 候 なら びを 一 一

の 通る 論う 澄如 十目 の 見る 新十 指
の 指さ 祈 好男 の 本家 本元 へ こと 是を 成す 不
倦 せし 程も 是 是 へ 交す ても 是 入 せ 下り 理承
お言 上 大勢 けり 下り 也 将び 一 ち 黄昏 の 罫 こと
る こと 六 衆人 系 店を 立 して 随 拜 門 より 是 果 然 在
北 の 方 へ と 歩り けり 往 來 へ 群 衆 の 宿 せ 指 堀 内 へ
あ づ け せ 徳 寺 の 寺 家 小 使 の 一 人 住 ら せ 入 偏 爲 て
も 衆 人 の 不 自 由 多 多 判 決 帝 給 所 より け 所 へ 引



判二郎が
猿寺の飯
佳厨

途邊の今もつらむを付るのと困るのうしのと他人の
悪くおきで自らのいんごわくも先利安天山の
半別をうめつらむおきんごう宮早毘沙門さぬへお百
彦をわびて降るに百鬼さるぬの地内をくろく
採んで来るんごうも判へたし一おきんごう廿四重に死
たておきんごう採るに自慢をさるぬのうらむめつ採る
今朝のお百彦の彼情人のおる百彦さるぬの
うらむおきんごう採るに百鬼のお死でもさるぬの
↑ ヲヤ堂

おきんごう何れも採るに自慢をさるぬのうらむめつ採る
おきんごう判へたし一おきんごう採るに百鬼のお死でもさるぬの
↑ ヲヤ堂

おも子今おん判官の好む船つけの山豆府を
母人からうら入らうらあ茶のあ版まわげらうて今
おん湯より降ろがけよ海の家このごア子
茶屋を焚て判官とおおびで判官が念佛様の
坊さんの指さすよ。おれも判官もお茶の山豆府
好らう母人からうら入らうらあ茶のあ版まわげらうて今
ぞこおんことをおんぞらひ。今日のお富女もあま
極秘のころへ

第十二回

おと娘とていへしおん女園全の自共言はし
花も色ぬもあはれなうらうら娘一人おん八
人のいへおんを判官の櫻居を同おんお家集
うらお娘の連今日もうらうら娘の雨の露
月のお娘とて櫻居ももおん各お娘の方
お園のあまの世の相らうらうらお娘の
お園のあまの娘も年齢十六七最盛な風



かろるる銀金の屋の三寄人な長男の男も家へも
お夏をいともて戸小口寄 清へ お夏も 一ハイ清さん
かたはトのひつちと明お逢入の娘お姿の一個の娘
二八とまゝの誠ト寐きたの侯のあぢけもたのあぢけ
月の肩雲の賣の白影もおふぬまのを致りの人深
世の笑四ハわれど今宵も憂ふまづみちを涙の眼元
露けき夜ふぬくまぬれふとまぬれぬれまづ一男も
涙も 清へ 未休らうか 実ふ頃 月見のうらうらうとせし
四郎

見入一 清へ 母人のま 下子今夜の裏の家へ連枝の
性で酒を呑らうと寝て居るこりうら 記いさのヨ
戸と大で鍵をうけておるまトそれよう茶の上お供
ま 戸何う出さうと種くと相成はたさうの清へ
うらまゝのいさまのヨ 清へ 左様言へておるは清へ
復のまのいさまのヨ 清へ 仕りぬがお身が
おれまのねまのまのいさまのヨ 清へ 仕りぬが
お夏もお夏もいさまのいさまのヨ 清へ 仕りぬが

早ふしを膝どつりつらうは身も甲の端くれごう辰が
まてぶのめりうそれどけきども未練ら〜おのいさまも
外交の思ひとく多しを候し〜公の中〜お候し
御もお茶の行状と具〜まよふ賞意を仕候し思ひ
物をさきもつて居るアテ 多し左様入るおきくそのひ
お〜もあつらひの 松や只はるお茶が 松の折らう借
松と金を久さまひ一件を 母人と言葉つてお洋の
まを腹をさきおきくおひのごとたつらう思つて居られ
も

是非他人の僞者ふりきく〜左様ありませうお茶の
頼もふ立私も今まを席勤なるを一通〜あつ何
母人の葉本花をさき〜あつ人余計の勢をうらま度もあひ
うら縁よ後さくばおあと相残〜をぬんで〜仕まう
う〜思ひ〜候と落〜を男の縁よまがらう〜
あんどお茶を言ノウま候よ 空口あぬんであるゆゑ
死ねり〜の〜もわらふ 多し〜それごうま先達申

くろく 煙水之用く 母人小強しと醫師さぬ小者く
賞りて 狂身小達ひらひと言うら子小者くとも
平氣で 家内の中へ 居るはヨナニ母人といふもの
けしからうの金を 爺のよけ 放まそ十二の節う今の
母人のよけ 爺のよけ 放まそ十二の節う今の
仕事で 今私に 家を 出ても 母人うけられる
理へるの 爺が 死ぬる 今まを け家小居や
あるひな 清く くれづるても 親とりの各が ありは 是

いとも け方が けつて ありと ありひ けしづる ありが
お願 ありが ありと ありが けが 幼児 爺小 別して
又 姉さんの ありと ありと ありと ありと ありと ありと
うらや ありと ありと ありと ありと ありと ありと
今 田舎 引込で 後小 居る 仕合が 悪く ありと 姉さん
さば 女希 元小 ありと ありと ありと ありと ありと ありと
関合して ありと ありと ありと ありと ありと ありと
ぢぢぢ ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと

かあるらるまひヨ 清ハテテ困るノウおあもけ身も親
身の縁のある人があひうらまざるの時よを細く行
わへ復さうの兄弟が在のどけけれども死んど母人が
不仕合を言ふのをけ身をも日法めあつて
成其の身をも音信不通ぶらう行ふひのチ 言ハク
おあもけ身も兄弟さんがあつてのチ 新やうにわく
清ハ 左様ぶらうままを誰もかへらるまひ
らう夫どけれどもけ身の只現在立流の家の子孫が

おの兄さんぶらうけが今ぢや根峯の方へ若原をい
はまるといふら身も空振るるまひヨ 言ハク
左様と清さんおあもけ 性根とまてて一ツ身業をい
おあもけ 新やうにまあして居るのかあまぐり言でうらまひ
よト思ひ切つらう様色を朝ふおあもけ物と身と
おの底も推量らるる不便 狂男の情 全振る
覚悟を振ておあもけと放ともいふ言う 言ハク
個が流しとらるる言でも死んでおあもけ言ハク 言ハク

さうして一男も得んぞ決ふ用哉 清一
さうしてどきどき
あつたのう まア一頁をさうして思ひてお笑ふ下我う
心を悩まして喜ぶ事ある物の周知とする身もある
あやふさふ別ある事同様にさうする事人のうらみけ
る

狂訓専門人

為永春曉著

お園の判次第の傍をたふあをせし人懐本の事
はなれ余るく美中の極ありしるは家小集人
る

腹達へおびはしつてお園をせぬま流女とそく
帰りの意通ふさる戯事もまじりては狂女の例ある
形もかた彼お園の本後終りて眼も涙もあはり
ましくらひそのまへにやおを意通ふしつて流女帰りの
情もかたは判つた今隠せる極小おをを意通ふ
帰りの事ごまの言をさうして候の暇えその伝ふ
多様をさうして門にはおを折しもは糸の内窓の用せ
頼もれて世所ふ入るる辰巳の米八丁度お園と初合

けお

此後まことを行くもの續がらぬやまの新編を
おんとうらぶ第一編をよみてうたふ

為永連

イヨウミン

春英

尾州ノ宮

春蝶

同ナカヤ

春鶯

東都飯倉下

春江

合

校

春色梅美婦祢卷之六了

春色梅美婦祢卷之六了

